

# 渡辺だいすけ 奔走記

第16号

2024年1月

— 発行者 —

福井県議会議員

渡辺大輔

福井市新田塚1-70-31

TEL.0776-50-2083

県政報告

新年号

新年あけましておめでとうございます。

いよいよ2か月後に北陸新幹線が福井にやってきます！

100年に一度のチャンス。

新たな福井県の幕開けにふさわしい1年となりますよう、私もしっかり取り組んでいきます！

調査項目

活動報告

## ★低学年生活支援員の拡充

小学校低学年、特に1年生は義務教育9年間のスタートを切る大切な時期です。机に座っての授業、給食の配膳、着替え…など、保育園や認定こども園の時期に比べ、集団行動の中での規則に沿いながら活動することが急に増えます。しかし、なかなかうまく対応できない児童が多いため、福井県では現在、小学校1・2年生で31名以上のクラスに、**担任とは別に1名の「低学年生活支援員」が配置**されています。児童一人一人にきめ細かな支援ができるので学級を運営するうえで欠かせない支援員です。

しかし、学校現場からは「児童の数が30名でも、29名以下でも児童の支援は大変であり、一人でも多くの支援員が必要」との声があがっています。

また図で示したように、**転校生が一人増えただけで、次の年に支援員が一人もいなくなるというケースも県内あちこちで起きています。**

今議会では、基本的な生活習慣を身に付ける大切な時期である低学年に対し、1クラス31名以上に限らず、一人でも多くの低学年生活支援員の配置を求めました。



R5			R6		
クラス	児童数	支援員数	クラス	児童数	支援員数
1組	35	1	1組	28	0
2組	35	1	2組	28	0
3組	35	1	3組	28	0
4組	35	1	4組	28	0
計	140	4	5組	29	0
			計	141	0

児童の転入による低学年生活支援員の激減例

Answer  
教育長

低学年生活支援員を配置することで、様々な児童への支援が可能となり、小学校生活のスタートが円滑なものになっています。例えば、1年生に配置されていた低学年生活支援員が進級時に学級人数が減ったことにより2年生時には配置できなくなったということがあることは承知しています。気がかりな児童が増えている実体も踏まえ、個に応じた指導ができるよう、今後の配置について前向きに検討していきます。

## ★ハピラインふくいの新駅設置



新幹線福井開業と同時に、県内を走っているJR北陸線の敦賀―大聖寺間は、第三セクターである(株)「ハピラインふくい」が経営を引き継ぐこととなります。ただ、当初から経営難が予想され、**1日2万人の利用客数があったとしても年間7億円の赤字が予想されています**。赤字については県と沿線市町が経営安定基金として支出する計画となっています。(ちなみにコロナ禍前はこの区間の1日の利用客数は約19,000人)。

ハピラインふくいは、少しでも赤字を少なくするため、より多くの利用客数を目指し、普通列車の本数を現在の102本から126本に増便する、福井―敦賀間の快速電車も導入する、などを検討しています。

ただ、**利用客数を増やす最も効果的な策が新駅の設置**だと思います。ハピラインふくいは現在、武生商工高校付近(新規利用客見込数200人)とサンドーム福井付近(〃200人)、それに現在の福井―森田駅間の「近町踏切」(福井市高木町)付近(〃900人)にそれぞれ新駅を設置する計画があります。

新駅設置には、駅の基本設計→詳細設計→建設着工という順となります。今議会では、特に利用客増が見込める近町踏切付近の新駅について、1日も早い設置を目指し、是非来年度に基本設計ができるよう要望しました。



### Answer 地域鉄道課長

福井市の新駅設置は大きな利用客数が見込めるため、できるだけ早い時期の設置を目指し、来年度の基本設計に向けて福井市と検討をしています。

## ★不登校について

県内の不登校児童生徒数は、令和4年度が1,401名(昨年度比29.8%増)と近年急増傾向にあります。私は、たびたび次のようなことを聞かれます。「昔は不登校なんていなかったのに、なぜ今はこんなに不登校が多いの?」

この質問には、人によって様々な答えが返ってきます。可能であれば是非専門家の科学的な分析をしていただきたいと思います。ただ私なりに気になっているのは、**今の子ども達は昔に比べて自己肯定感が低くなっている傾向にある**ことです。世界の子ども達に比べても低いという調査もあります。なぜ低いのか、そのことが不登校と直接の関係があるかどうかは、しっかりとした検証が求められます。



こうした子ども達の受け皿となる校内教育支援センター（福井県では「校内サポートルーム」と呼ぶ）が今、注目されています。校内の空き教室を活用し、支援員が常駐し、在籍する教室に入れられない子ども達を受入れる教室です。その日の活動は、基本子ども達が決めます。長い間不登校だった児童生徒が通えるようになったという事例も、いくつか報告されており大きな効果が期待できます。

現在、県内で5校設置されている「校内サポートルーム」について、来年度に向けてより多くの学校に設置するよう要望しました。



広島県の校内フリースクール  
SSR（スペシャル・サポート・ルーム）

**Answer**  
**知事**

学校の規模や不登校の児童生徒の数を見ながら、多くの不登校の児童生徒が支援を受けられるように、財政的な制約はありますが、国の支援も活用しながら、できるだけ大きく拡充をしていきたいと考えています。

## ★ 県立大学の文系新学部



昨年11月11日に、**県立大学文系新学部の設置**に関する有識者会議から、具体的な提言がなされました。学部の方向性としては、経済の基礎的な理論を学びながら、地域社会、地域産業の高度化・グローバル化に貢献する人材を養成する学部とし、その名称は「**地域イノベーション学部**」「**地域共創学部**」「**地域探求学部**」の3案が挙げられています。

1学年の定員は70名程度です。

ここで疑問が生じます。県立大学には既に「経済学部」があり、経済学科と経営学科の2コースを設けています。今回提言がなされた学部は、従来の経済学部とどこが違うのか、明確には伝わってきません。また、今年の2月に県内高校2年生を対象にアンケートを行ったところ、**県外大学を希望する理由の中で「県内に希望する文科系の学部・学科がないため」が33%で最も多く**、こうした高校生の受け皿とする**ことも文系新学部設置の大きな目的**でした。今回の提言は、**果たして県内高校生が希望する文系新学部となり得るのか**、本格設置までに十分な議論が必要であると思います。

さらに、新学部の立地場所として従来の永平寺キャンパスと福井駅周辺のまちなかキャンパスの2案が挙げられています。私は、福井駅周辺の活性化だけでなく、地域鉄道など二次交通の利用拡大にもつながるまちなかキャンパスの設置に向けて取り組みを進めるべきであると考えます。

今議会では、そうした点について議論を進めてきました。福井県の活性化につながる学部となるよう、私も取り組んでいきたいと思ひます！



# フリートーク



右の表は、2005年に出题された東京大学の地理の入試問題です。設問は次の通りです。

(1)表のa～dは、①成田空港の上海行の航空便、②東京郊外の住宅団地のバス停(最寄りの駅の駅前行き)、③人口約10万人の地方都市の駅前のバス停、④人口約5,000人の山間部の村のバス停、の時刻表のいずれかである。a～dに該当するものの番号(①～④)を答えよ。

時	a	b	c	d		
分	分	分	分	分		
6			55	27	40	52
7			34	2	12	22 32 42 52
8	15		7 35	4	16	30 42 52
9		50	20	14	35	55
10		0	21 52	19	39	59
11		25	32	19	39	59
12			20	19	39	59
13		50	53	19	39	59
14		20	7	19	39	59
15	45	5	20 42	19	39	59
16			40	19	39	
17		0	15 50	0	14	40
18		10 35	50	4	24	44
19		5	25 56	4	24	44
20		20	20	9	29	49
21			15	9	29	49
22				9	29	

みなさん、いかがでしょう? 正解は別として、この問題なら、誰もが「面白そう!」という気持ちで取り組みそうです。小学生高学年でもできそうです。私も社会科の教員でしたが、是非授業で取り上げたい質問です。

いずれも月曜日の時刻(臨時便を除く)

子ども達からは、どんな意見が飛び出すでしょう? 「便数が多いから、dは②か③や!」「山間部は人口が少ないからaは④です!」…など、いろんな声が聞こえてきそうです。なぜそう思ったのか、考えを話し合うのも面白いです。ちなみに正解は、人口が少ない山間部なのでaは④です。また、東京郊外は極めて人口も多く、しかも朝の通勤時間帯に多くの便が集中しているのでdは②。bは、航空便は搭乗前に多くの手続きをしなければならないので、「34分発」や「53分発」では分かりにくく間違えやすいという理由で①となります。cは残りだから③…などとなります。

今の入試で問われるようになった学力は、以前のように知識力だけでなく、知識や生活体験で得た情報を基とした様々な思考力や、自分の考えを文章や言葉で表現する力へと移り変わっています。こうして得た学力こそが、生涯にわたって生活するうえで生きる学力となるのです。

そのため学校も、真の学力を身に付けさせる授業が求められます。教科書を覚えるだけの、教師からの一方通行だけの授業ではなく、子ども達がお互いの考えを出し合いながら、社会や科学の真実に迫っていく、今はこんな授業が求められます。子ども達もこうした楽しい授業を求めています。上述の問題を例に挙げると、山間部はどんどん過疎がすすんでいること、そのため路線バスも廃線となる可能性もあること、逆に東京の人口一極集中、特に若者が地方から都会へと流出していること、など現代が抱える課題へと発展させることもできます。

ただ、子ども達にとって楽しい授業を行うために、教員は多くの準備にける時間を必要とします。毎日4時間から5時間の授業を受け持つ教員にとってはなおさらです。しかしながら、今の学校現場は本来教員がしなくてもよい業務が山のようにあり、なかなか授業の準備をする時間が確保できていないのが現状です。

全ての教員は、子ども達に楽しい学校生活を送ってほしいと願っています。教員には、そのための時間をしっかり確保することが大切です。教員の多忙化解消の一番の理由が、そこにあると思います。

「先生! 今日の授業、楽しかった!」そんな子ども達の声があちこちから聞こえるような学校にするため、私もしっかりと取り組みを進めます!

お困り、お悩みなどありましたらぜひご相談を!

## 渡辺大輔事務所

〒910-0067 福井市新田塚 1-70-31

TEL.0776-50-2083 FAX.0776-50-2086

E-mail d-wat571@outlook.jp

<https://watanabe-daisuke.info/>



Facebook用



オフィシャルサイト